**Ⅰ** 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ドイツの哲学者・M・ハイデガーは、『言葉への途上にて』（一九五〇―五九）所収の論文「言葉についてのある対話より」のなかで、対話の相手である独文学者・手塚富雄氏に次のように語っている。

「一九三四年の夏学期に、私は〈論理学〉という標題のもとに一つの講義をしました。〈論理学〉とはいうものの、それはロゴスについての省察であり、私はこのロゴスに言葉の本質を求めていたのです。」

何故、ハイデガーにとってロゴスが言葉の本質とみなされたのか。これを理解するためには、ひとまず〈ロゴス〉という極めて西欧形而上学的な概念をその語源にさかのぼって考えてみる必要がありそうだ。

そもそもロゴスというギリシア語は、言葉、議論、計算、比例、尺度、理法、理性、根拠などという複雑多様な意味をもっていた。そこでハイデガーは、ロゴスが何であるかを推定するためにこの語の動詞にあたる〈レゲイン〉に注目する（『ロゴス・モイラ・アレーテイア』参照）。レゲインとは、「述べる、言う、物語る」であるとともに「読む」ことでもあるが、そこに共通する基本的な意味は、「とり集めて目の前に置く」ことであるという。

もちろん、「とり集める」といっても、ただ乱雑な集積をつくるのではなく、一定の尺度に従って多種多様な異物を一つのカテゴリーに括ることであるのだから、それは〈 A 〉と〈 B 〉をも含む概念と言えるだろう。現在でも使われるカタログ（←カタロゴス＝整理のための目録）という語がもつ、分類と整頓の概念を考えてみればわかりやすい。ここに、万物を支配する〈法則〉、ものごとの〈根拠〉、世界の〈理法〉、ひいてはのちのキリスト教的な唯一、絶対神の概念が導き出されるもとがあった。「太初に言（ロゴス）ありき。言は神と偕にあり、言は神なりき。」というヨハネ伝福音書の冒頭の文言が、ヘレニズムの正統的遺産であることは想像にかたくない。

ところで、ハイデガーはその思想家としての一生のごく初期から言葉と存在の関連に思いをめぐらしていた。一九一五年の教授資格取得論文は「ドゥンス・スコトゥスのカテゴリー論および意味論」であるが、これについてのハイデガー自身の解説を聞いてみよう。

「〈カテゴリー論〉とは存在者の存在の究明であり、〈意味論〉とは存在との関連における言葉についての形而上学的省察です。けれどもこの連関のすべては、当時の私にはまだ見透(みとお)せていませんでした。言葉と存在への省察が早くから私の思索の道を規定していたので、かえってその究明は可能な限り背景にしりぞいたままになっていたのです。おそらく『存在と時間』という本の根本的な欠点は、私があまりにも早く、あまりにも先にまで進みすぎたというところにありましょう。」（前掲書）

彼の考えでは、森羅万象をカテゴリー化して意味あるものと見ることができるのは人間だけであり、これはアニマル・シンボリクム（象徴を操(あやつ)る動物）としての人間が有する言葉の力によるものにほかならない。つまり、人間のもつ言葉こそ、「とり集めて目の前に置く」ロゴス（←レゲイン）であったのだ。

そうしてみると、ロゴスとしての言葉は、すでに分節され秩序化されている事物にラベルを貼りつけるだけのものではなく、その正反対に、名づけることによって異(い)なるものを一つのカテゴリーにとりあつめ、世界を有意味化する根源的な存在喚起力としてとらえられていたことになる。くだいて言えば、私の「頭」と魚の「頭」、私の「脚」とテーブルの「脚」は、それぞれ「頭」と「脚」という言葉によって同じカテゴリーに括られていくのである。[C]

いきおい、ロゴスとしての言葉は、その根源においては〈神〉の言葉であって、アダムの言葉ではない。命名という行為には、実は二つのまったく異(こと)なる作用があった。『旧約聖書』の「創世期」の次の二節が、象徴的にその相違を物語っている。

「神、光あれと言ひ給ひければ、光ありき」（第一章、第三節）。

「ヱホバ神、土を以て野のすべての獣と空のすべての鳥を造り給ひて、アダムのこれを何と名づくるかを見んとて、これを彼のところに率ゐいたり給へり。アダムが生物に名づけたるところは、皆その名となりぬ」（第二章、第十九節）。

前者では〈光〉という言葉によってはじめて光が存在し、後者では既存の生物たちがあとからさまざまな名を与えられている。つまり命名には、それまで存在しなかった対象を［D］根源的作用と、すでに存在している事物や観念にラベルを貼る二次的な作用の二つがあるのである。

古代から名称にまつわる神話や伝説は少なくない。たとえばエジプト神話には、太陽神ラーがそれまでひたすら隠していた本名を女神イシスに知られてしまったために、イシスがその力を奪って全能となる話がある。イギリスの民俗学者・J・G・フレーザーによれば、現代でも、オーストラリア南部に住むユイン族にあっては、父親は入団儀式の際に息子にだけ自分の名を打ち明けるが、他の人びとには隠し続けるという。

また、その名を口にすると危険な動物が出て来て害をなすことを恐れるあまり、熊のことを「蜂蜜」（スラブ語）とか「褐色のもの」（古代高地ドイツ語）という仮の名で呼んだ慣習も珍しくない。これはすべて「名が対象と同じ力をもつ、もしくは対象を出現させる」という言霊思想であり、アッカド語では「存在する」と「命名する」とはE<u>シノニム</u>なのである。

これを単に神話的、非論理的思考と笑ってはなるまい。世界のロゴス化とは、それまで分節されていなかったマグマの如き生体験の連続体に区切りを入れて、これを観念なり事物なりのカテゴリーとして存在せしめることなのである。具体的に言えば、日本語を母国語とする人びとに、「犬」と「狸」が別の「動物」であるような意識を生ぜしめたり（フランス語ではいずれもchienと呼ぶ）、「蝶々」と「蛾」を別の「昆虫」であるように思いこませたり（これまたフランス語では同一の名称papillonでしかない）すること、さらにはメタ的レベルにたつ「動物」とか「昆虫」というクラス名で、それぞれ「犬」と「狸」、「蝶々」と「蛾」を同一カテゴリーにまとめることを可能にするものは、言葉の力以外のなにものでもない。同じ名づけと言っても、カテゴリー自体を生み出す命名作用（世界の分節）のような一次的機能と、生まれた犬に「ポチ」と名づける二次的命名作用（ラベルの貼付）とし

ての機能の二つがあるのである。第一の命名作用について、フランスの現象学者・メルロ＝ポンティは次のように言っている。

「事物の命名は認識のあとになってもたらされるのではなくて、それは認識そのものである」（『知覚の現象学』）。

幼児にとって対象物というものは、それが名前をもった時にはじめて知られ、存在する。そうしてみると、ロゴスとしての〈名＝言葉〉があってはじめて世界は分節され、実質的なもろもろの差異が構造的同一性で括られることによって存在を開始するのであるから、ロゴスが生み出したカテゴリーこそが、一見自存的実体と思われていた〈指向対象〉だと言わねばならない。〈語る〉ことは真の意味で〈名づける〉ことであり、言葉による外界の解釈であり、差異化である。そして世界が差異化されると同時に、私たちの身と意識の方も差異化されるという相互作用を見逃してはなるまい。

これに関して、私自身も興味深い経験をしたので披露しておきたい。走っている電車のなかの出来事だった。がらがらに空いている座席に母親とともにすわっていた三歳ぐらいの女の子が、「デンシャ、デンシャ」と習いたての単語を一生懸命口のなかで呟いては、周囲の窓枠や席の布地を手でさすって言葉と物のつながりを確認していた。ところがそのうち、首をかしげながら母親にこうたずねたのである。「ママ、デンシャって人間？　それともお人形？」

G

おそらく、感覚＝運動的分節から言葉による分節へと移行していく象徴化過程にあって、この女の子の世界と意識が、「電車」という語を知る前には、次のように分けられていたのであろう。一方に「動くもの、そして柔らかく温かいもの」のクラスがあり、他方に「動かないもの、そして固く冷たいもの」というカテゴリーがある。これによって、「人間」と「人形」という概念の差は無理なく処理されていた。「人間」は「動いて、柔かくて、温かいもの」のカテゴリーにすっぽり入っていたし、「人形」はそれが外見上いくら人間に似ていても、「動かない、冷たい、固いもの」という全く別のカテゴリーに属している。

ところが、「デンシャ」という言葉を習い、同時にその対象を認識した時、「H」新しい指向対象が誕生した。この子が混乱

したのも無理はない。彼女は次第に象徴の森という名の文化のシミュラークル[注1]に入って行く。くりかえし、くりかえし命名を通して、知覚の上に刻一刻と密になる認識の網の目がかぶせられ、本能図式は言葉による再編成を強いられる。

あの有名なヘレン・ケラーのエピソードも同じである。本能的感覚＝運動の次元から文化的世界への飛躍を可能にしたのが言葉の習得であった。水のほとばしりとともに手のひらに綴られたwaterという語は、あくまでも触覚イメージに過ぎないが、このイメージこそがそれまで存在しなかった意味をつくり出し、外界が以前とは別様に分節されたからである。それまでの水の知覚は、突然別の網目にからめとられ、言葉の指向対象としての「水」になった。この対象物は、人間という種がもつゲシュタルト[注2]としての〈モノ〉ではなく、文化のなかでのみ意味をもつ〈コト〉として存在し始めたと言えるだろう。

そもそも言葉の指向対象が生れるということは関係づけられるということにほかならず、関係の場にあっては自存的な個は存在しない。ヘレン・ケラーの場合は、最初の一語を覚えてから一挙に言葉の世界が開けたと報告されているが、実は、「最初の一語」と言われているwaterも、実体的な一語なのではなく、彼女が習得したのは「最初の分節」つまりはwater／non-waterという差異化だったのである。

ロゴスとは、第一義的には右のような始源的分節化を可能にする言葉である。そしてその意味発生の現場にあっては、単に「語る、書く」ことがロゴスの働きなのではなく、「聞く、読む」ことも同じ働きとみなされる。

ヘラクレイトスの「おまえたちが、私にではなくロゴスに聞いて、同じロゴスで〈全ては一である〉と言うのが賢いことだ」（断片五〇）という文に独自の解釈を与えたハイデガーは、「レゲイン＝語る＝とり集めて前に置く＝聞く＝〈存在〉が隠れなさのうちへと現前する」という等式で結び、〈ロゴスとしての言葉〉と〈生成する存在〉との関連に従来の形而上学とは全く異なった新しい光をあてたのであった。

（丸山圭三郎『言葉と無意識』講談社　一九八七年より引用　問題作成の都合上一部変更）

注1　シミュラークル　複製としてのみ存在し、実体をもたない記号のこと。記号がひとり歩きして現実を喪失する状態をいう。

注2　ゲシュタルト　部分の寄せ集めではなく、それらの総和以上の体制化された構造のこと。形態。

問一　空欄部 A と B に入る語句の組み合わせとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 1 。

① A：形象化　B：統合
② A：類型化　B：連続
③ A：複雑化　B：融合
④ A：秩序化　B：統一
⑤ A：規則化　B：離散

問二　傍線部C「同じカテゴリーに括られていくのである」とあるが、同じ分類に相当するものとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 2 。

① 私の「腕」と猫の「手」
② 私の「口」と鳥の「歌」
③ 私の「手」と猫の「耳」
④ 私の「指」と猫の「耳」
⑤ 私の「声」と鳥の「声」

問三　空欄部 D に入る言葉として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 3 。

① 探し出す
② 生み出す
③ 浮き彫りにする
④ 意識させる
⑤ 想像させる

問四　傍線部E「シノニム」の意味として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 4 。

① 同義語
② 反義語
③ 俗語
④ 擬音語
⑤ 古語

問五　傍線部F「世界が差異化されると同時に、私たちの身と意識の方も差異化されるという相互作用」とは、どういうことか。空欄部を次の形式に従って四十五字以内でわかりやすく記しなさい。ただし、「対象物」「分節」の二語を必ず用いること。解答は**国語解答用紙**。

対象物を名づけることは、その人間にとって、世界が**四十五字以内**ことである。

問六　空欄部 G には、次の枠内のイ～ホで構成された文章が入る。論旨が通る順に並べ替えたものとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 5 。

イ　もちろん、言葉以前に感覚＝運動的なものによる分節行為はあるだろう。

ロ　「デンシャは人間か、人形か」という妙な質問が出てくるのもそのへんに理由があるのだ。

ハ　しかし、言語習得によって身につける分節線は、そういう自然の生物的な区切りではなく、まことに非自然的な画定である。

ニ　だからこそ、子供の側では、なかなか本能的に納得できないことが多い。

ホ　言葉を覚えはじめたばかりの幼児にとっては、毎日の瞬間、瞬間が新しい分節、つまり世界の意味づけ行為の連続なのだ。

①　イ → ホ → ロ → ハ → ニ

②　イ → ロ → ハ → ニ → ホ

③　イ → ハ → ホ → ロ → ニ

④　ホ → イ → ハ → ニ → ロ

⑤　ホ → ハ → ニ → ロ → イ

問七　空欄部 H に入るものとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 6 。

① 動くが、冷たく固い
② 動くが、温かい
③ 動くが、柔らかい
④ 動かないが、柔らかく温かい
⑤ 動かないが、温かく固い

問八　本文の内容と合致しないものを、次の①～⑤の中から二つ選びなさい。解答番号は 7 。

① あらゆる現象をカテゴリー化して意味のあるものと認識できるのは、人間が有する言葉の力によるものにほかならない。
② ヘレン・ケラーの言葉の世界が一挙に開けたのは、water／non-water の統合によるものであり、water という一語の習得によるものではなかった。
③ 世界のロゴス化とは、それまで文節されていなかったものを観念なり事物なりのカテゴリーとして存在させることである。
④ 命名には、森羅万象を分節するという一次的機能と、既存の事物や生物、そして観念にラベルを貼るという二次的命名作用の二つがある。
⑤ 言葉の指向対象が生まれるということは、言葉と対象が関係づけられるということだが、例外的に自存的な個が存在する場合もある。

問九　次の1～5の傍線部にあてはまる漢字を、それぞれ①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 8 ～ 12 。

1　気の合う友達とキチに富んだ会話を楽しむ。 8

①基　②機　③気　④既　⑤記

2　名誉キソンの訴訟が起こされた。 9

①規　②軌　③記　④毀　⑤既

3　財政についてのシモン機関が設立された。 10

①諮　②試　③指　④司　⑤史

4　病状はゼンジ回復している。 11

①随　②漸　③逐　④良　⑤全

5　ベランダにはカンヨウ植物が置いてある。 12

①環　②鑑　③歓　④感　⑤観

**Ⅱ**

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

言語の特性を語るということは、言語以外の人間交流のあり方との比較において語ることになりますので、自然と、言語がもっている制約に注目することにもなります。

言語の特性の一番目として、言語行為は音声という特殊な知覚・運動器官を活用することを基本にしています。この事実は、指摘するまでもない当たり前のことのように見えますが、じつは意外に奥深い意味をもっていると私は考えています。

一つは発生的に見て、なぜ音声でコミュニケーションするようになったのかという問いが出てくると思うのですが、これは、自然科学的な捉え方をすると、ヒトの発声器官(呼吸器官、声帯、口蓋(こうがい)など)が解剖学的に見て複雑な音韻[A]を出すのにたまたま適していたからだという、自然選択説的な答え方になります。

しかし私は、この答え方にはどうも疑問の余地があると思っています。というよりも、そもそも、なぜ言語は音声を手段として用いるようになったのかという問い自体が、一つの転倒した問いのように思われる[B]のです。

というのは、こういう問いを立てると、音声表出以前に、ヒトどうしのあいだに言語的な観念世界が共有されていたことを前提にしなくてはなりません。まず何か表出したい確乎(かっこ)とした思想内容、意識内容のようなものをヒトがもっており、それをよりよく伝えるために、音声という恰好(かっこう)の手段があったという話になってしまいます。思想内容や意識内容が同じで、ほかにもっとそれをうまく伝え、受け取る知覚・運動器官があれば、そっちを使って同じような言語文化を発達させることが原理的にはできたはずだ、と。

しかし、はたしてそうでしょうか。じつは『「恋する身体」の人間学』(ちくま新書)という本のなかで、私はちょっとそれに近いことを言ってしまったのですが、あれからよくよく考えてみて、どうもそう決めつけられないなと思うようになりました。ソシュールの言語本質規定にならえば、聴覚印象と概念とは切り離すことができません。シニフィアンがただちにシニフィエを指定するわけですね。

だとすると、音声として表出された言語以前の思想内容というようなものを想定するのには無理があるのではないでしょうか。また、言語の発生期を想像してみると、概念がまずあって、それをなんとか音声にするために苦労したというような過程を想定することはできないと思います。

原始人は、ゴリラみたいに、要するになんだかわあわあ言い合っていて、それはそれぞれごく限られた共通の信号の意味をもっていたのでしょうが、やがて同じ対象を指して同じ音韻の連鎖を用いるようになっていくプロセスが熟していきます。どうしてそういうプロセスが熟してきたのかはよくわかりません。とにかくそうなってきたのですね。

そして大事なことは、この場合、そのプロセスそのものが、まったく同時並行的に「概念」についての意識がつくられていく過程と重なっていたと考えられることです。おそらく、個物としてのリンゴAとリンゴBとをなんとなく同じカテゴリーに属する「あれ」と判断する意識は、〔リンゴ〕という音韻が確定する以前からあったでしょう。これは動物ももっている一種の感覚的な把握能力ですから。

しかし、「リンゴ」という概念によって括られる事物一般があるぞという意識は、さっき見たリンゴAも、いま目の前にあるリンゴBも、同じ種類のうまそうな「あれ」であると判断できる意識とは次元が違います。

「リンゴ」という概念にかかわる意識の存在は、目の前にリンゴがなくても、「リンゴなるものがある」という仮想の意識(リンゴ概念一般)が確立していることを意味します。そしてこの意識は、音声の交流過程と同時並行的につくられていったと考えるほかありません。そういうわけで、C音声が思想を伝えるためにたまたま便利な手段だったという考え方はおかしいのではないかと私は思います。

では、どういう考え方をすればよいのでしょうか。人間的な意識(思想的意識、概念的思考の意識)というものが、いま私たちがもっているようなかたちでもともとあったのではなく、そもそも素朴な音声的交流の実践的な積み重ねを通して、しだいにつくられていったのだと考えるべきなのです。

もう一度くりかえしますと、概念的な思考の意識は、目の前に指示対象がなくてもそれを思い浮かべられる意識、というよりも、

まさにないものをあるかのように想定できる意識です。これは、私の考えでは、音声でなくてはできなかったのです。

音声的なやりとりと概念的な意識の醸成・確立とのあいだには必然的な連関があるように思われます。どうしてそんなことが言えるのでしょうか。これを考えるためには、「音響」の知覚というものがどういう特性をもっているかにまでさかのぼってみなくてはなりません。

音響知覚の特性は、大きく言って三つあります。

一つ目は、音というのは、その発生源が空間的にうんと離れていたり、発生源が物陰に隠れて見えなくても知覚できるという点です。この特性は、原始人が信号を伝え合うのにとても便利ですね。特にマンモスをみんなで捕るというような共同作業にとっては都合がいいでしょう。危険が迫ってきたときに、みんなに合図を送るというような場合にもとても都合がよかったと思います。味覚や触覚だと接触しなくては伝えられませんし、嗅覚でもごく近傍（きんぼう）にいなくてはなりませんから限界があります。

音響知覚の二つ目の特性は、それ自体では何か実体的な「対象」とか「何かあるもの」を措定（そてい）する（それとして定位させる）ことをさせにくいという点です。

たとえば、遠くのほうからゴーッという音が聞こえてきたとします。私たちはそれが聞こえてきたとき、いったいなんの音だという不安を抱えますが、この不安は聴覚に独特のもので、それ自体としてはその発生源がなんであるかについての確信を与えないのですね。それで、近くに行って確かめるなり、そのあとに何かが迫ってくるなりして、他の感覚領域の視野にその発生源が入ってくると、はじめてそこで私たちはこの事物からこの音が出ていたのだということがわかります。

そのとき、私たちは、その事物（たとえば機械）つまり発生源を聴覚の「対象」、聴覚それ自体にとっての「何かあるもの」と考えてしまいがちです。D それは、視覚経験や触覚経験に慣らされた私たちの錯覚です。たとえば、「近くに行って確かめる」というのは、視覚や触覚や味覚や嗅覚によって確かめるということですが、主として視覚と触覚によってですね。

ところで、すべての感覚にはそれぞれ、それに対応する「対象」「実体的な何かあるもの」があるはずだと私たちはふつう考えていますが、この考え方には一つの転倒があります。「対象」という概念を私たちは自明のものとして疑いももたずに使っていま

すが、そもそも実体的な「対象」「何かあるもの」という概念を私たちがもてるのは、視覚と触覚(特に手で意識的に触ること)によってなのです。というのは、「対象」とか「実体的な何かあるもの」という概念が成り立つためには、形、大きさ、色、肌触り、嵩(かさ)といったものについての実感が必要だからです。

言い換えると、「私がいま何かを見ている」とか「私がいま何かに触っている」という経験の総合があってはじめて、「対象」という概念が成り立つのです。その場合、いったい何が起きているのかというと、「私」と「対象」、「主体」と「客体」の安定した分離が生じているのです。つまり、視覚と触覚においては、その感覚が主体的な感情のざわめきにただちには直結しないような、相対的に自立した関係が成立しています。

もちろん、これは F にであって、見たこともない不気味なものがあらわれたとか、ざらざらする気持ちの悪いものにふれたときに、感情がざわめくということはありえます。しかし総じて、ある対象をまさに「私」とは区別された「対象」としてつき放して把握できるのは、主として視覚と触覚におけるある安定感を通してだと言うことができます。これは、赤ちゃんにとっての基本的な世界像の確立がどういう経験によって完成していくかを想像してみると、よくわかると思います。

G 、聴覚の「対象」という概念は、たいへん成立しにくい面をもっています。先ほど言いましたように、発生源としての機械は、視覚や触覚の対象ではあっても、聴覚の対象とは言えません。

では、音それ自体を対象と考えることができるでしょうか。これも難しいですね。私たちは、聴覚体験や音響体験を、主体とそれに向き合う対象という二極分離の相のもとに捉えることができないのです。いわば音響体験は、まさに主体の体験それ自体であって、それは「心」とか「内面」とか呼ばれているものを直撃するのです。

もっと正確に言えば、前もって「心」や「内面」があって、しかるのちそこに音響が中身を満たしにやってくるのではなく、音響体験こそが、「心」とか「内面」などと呼ばれる意識形式を形成する重要な条件となるのです。

まだ目の見えない生まれたばかりの赤ちゃんに、ある音を聞かせると、びくっと体を痙攣(けいれん)させる「モロー反射」というのがあります。これなどは、対象を措定できない段階の人間がいかに全身で刺激を受け取っているかを示す恰好の例です。

しかしじつをいうと、赤ちゃんは母親の胎内にいるときから、母親の声、血流の音、外側から入ってくる響きなどを通して、音響体験をしてきています。そのプロセスですでに、基本的な内面形成の枠組みというものをつくってきているのだと考えられます。

ただしそれは、あくまでだれにでも共通する基本的な枠組みということであって、情操の形成というような意味合いではありません。お母さんの妊娠中にモーツァルトを聴かせたからといって、情操豊かな子どもが生まれてくるなどということは保証の限りではありません。

さて、ここから、音響知覚の三つ目の特性に話が移ります。なぜ音響体験が「心」や「内面」を形成する重要な条件になるかというと、音響の知覚は、必ず時間に沿った体験だからです。いっぽうで私たちの意識は、たえず時間に沿って流れています。それはそれ自体としてはストップを許しません。この意識の不断の流れのなかで固定的、安定的に捉えられるもの、それを私たちは「対象」と呼んでいます。

ところが、音響は［I］ということはありえませんから、いつも意識の流れに同期せざるをえません。それはどこから聞こえてくるかという方位の感覚以外には、空間的な定位の条件をもたないのです。［J］、音を聞いている体験は、私たちの意識がそれにとりついて時間の流れに沿って一緒に歩む体験そのものを意味します。それは、いつも意識の本質的な不安状態、「流れ」状態とともにあるのです。

音楽を聴く体験を想像してみましょう。私たちは名曲を聴くとき、音楽に身を浸（ひた）すとか、身をゆだねるといった表現を好んで使います。浸す、ゆだねるとは、ある知覚の時間的な流れに全心身を同期させていることを巧みに表現した言い回しです。

視覚芸術である絵画や彫刻を鑑賞するときに、それに身を浸すとかゆだねるといった言い方はあまりしません。それらは固定された確乎たる「対象」として眼前にあり、私たちは「主体」である自分をも安定した存在としてそれらに対峙（たいじ）するわけです。

ニーチェは、『悲劇の誕生』のなかで、音楽をディオニソス的な芸術、美術をアポロ的な芸術と呼びました。ディオニソス的な芸術とは、精神をその暗い奥底から揺さぶって、人びとを陶酔に導く芸術という意味です。それは理性の光を逃れて、輪郭の確然としない情緒の流れるままに、ときには無秩序な不安の支配する世界に人を連れていきます。

これに対してアポロ的な芸術とは、隈なく光の当たった空間のなかで、明晰さ、安定性、秩序を旨とするところに美を見出す芸術です。要するに「対象」的な芸術なのですね。

『悲劇の誕生』は、ワグナーの音楽を讃えるという目的意識をもった芸術論ですから、K な芸術である音楽を肯定するという価値問題に重点が置かれています。しかし、いま私たちが言語について考えるにあたって、このニーチェの直観から汲み取るべきなのは、精神の内奥からの響きとして捉えられた音楽芸術の象徴的な意味が何を普遍的に示唆しているかという問題です。

つまり、音響体験は他の知覚体験からは抜きん出て純粋な時間充足体験です。それは私たちの意識の持続がもっている、対象に定着せずにたえず不安を抱えながら前に進むという特性と軌を一にするのです。ですから、ここから、言語的なやりとりが基本的には音声でなくてはならない必然性が説明できそうです。

言語的な意識の持続は、音声が以上述べてきた音響の三つの特性(発生源が見えなくても知覚できること、「対象」として措定できないこと、時間に沿って流れること)を保存していることによって支えられるのです。いわゆる「内面」を実質的に埋めているのは、音響の特性が観念化したものだと言うことができると思います。私たちの内面は、言語的な意識の持続でいつもざわめいているのですね。

(小浜逸郎『ＰＤＦ版　言葉はなぜ通じないのか』ＰＨＰ電子　二〇一四年より引用　問題作成の都合上一部変更)

問一　傍線部Ａ「音韻」の類義語として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 13 。

① 音声
② 音節
③ 音素
④ 同音
⑤ 発音

問二　傍線部Ｂ「問い自体が、一つの転倒した問いのように思われる」とあるが、その理由として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 14 。

① 音声と言語的な概念は切り離して考える必要があるため。
② 音声以前に思想内容を想定することは無理があるため。
③ 音声以前に人間同士が同じ思想を持つ必要があるため。
④ 言語表現の手段として音声を用いることに苦労したため。
⑤ ヒトの発声器官が複雑な音韻を出すのに適していたため。

問三　傍線部C「音声が思想を伝えるためにたまたま便利な手段だったという考え方はおかしい」と筆者が考える理由は何か。空欄部を次の形式に従って三十字以内で記しなさい。ただし、「概念」「音声」という二語を必ず用いること。解答は国語解答用紙。

三十字以内ため。

問四　空欄部D、G、Jに入る語句の組み合せとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は15。

① D：しかし　G：これに対して　J：ですから
② D：しかし　G：しかしながら　J：ですから
③ D：だから　G：これに対して　J：ですから
④ D：ちなみに　G：これに対して　J：つまり
⑤ D：ちなみに　G：しかしながら　J：つまり

問五　傍線部E『私がいま何かを見ている』とか『私がいま何かに触っている』という経験の総合があってはじめて、『対象』という概念が成り立つ」とき、どういうことが生じているのか。その内容として不適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 16 。

① 視覚や触覚は、実感を得ることができるため、主体と対象を分離できる。
② 視覚や触覚は、主体と対象を分離するが、聴覚は対象を分離できない。
③ 視覚や触覚は、主体の感情をただちに揺さぶるため、主体と対象を分離できる。
④ 視覚や触覚は、主体自体の体験ではないため、主体と対象を分離できる。
⑤ 視覚や触覚は、相対的に自立した関係を生み出すことができる。

問六　空欄部 F 、 I 、 K に入る語句の組み合わせとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 17 。

| | F | I | K |
|---|---|---|---|
| ① | 相対的 | 固定的 | アポロ的 |
| ② | 主体的 | 流動的 | アポロ的 |
| ③ | 相対的 | 流動的 | ディオニソス的 |
| ④ | 主体的 | 固定的 | アポロ的 |
| ⑤ | 相対的 | 固定的 | ディオニソス的 |

問七　傍線部H「音響体験こそが、『心』とか『内面』などと呼ばれる意識形式を形成する重要な条件となる」とあるが、この重要な条件になる理由として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 18 。

① 音響は、意識の流れに同期しているため。
② 音響は、基本的な内面形成の枠組みを作っているため。
③ 音響は、主体と対象に分離することができないため。
④ 音響は、発生源が見えなくても知覚できるため。
⑤ 音響は、心や内面の中身を満たすことができるため。

問八　本文の内容と合致しているものとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 19 。

① ある事物を識別する意識は、対象をある言葉で示すプロセスとは別に確立されている。
② 音響体験は人格形成に大きな影響を与えており、妊娠中に音響体験させることが望ましい。
③ 音響体験は味覚や嗅覚などと同じく純粋な時間充足体験であり、対象と分離して前に進んでいる。
④ 音声は共通意識を伝える手段として偶然適していたため、伝達手段として用いられている。
⑤ 音声的なやりとりと言語的な意識の構築の間には、必然的な関わり合いがあると筆者は考えている。

問九　次の1～5の傍線部にあてはまる漢字を、それぞれ①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 20 ～ 24 。

1　試験のために徹夜したため、授業中にスイマに襲われた。 20

①摩　②磨　③麻　④魔　⑤間

2　差別を助長する決定にはシュコウしがたい。 21

①趣　②首　③手　④酒　⑤主

3　交渉を進めるために、巧みな話術で反対派をカイジュウした。 22

①充　②柔　③従　④縦　⑤獣

4　祖母はクドクを積めば良いことがあるという。 23

①口　②苦　③功　④工　⑤紅

5　祖父は自由ホンポウな人で、やりたいことをやる人でした。 24

①峰　②俸　③奔　④邦　⑤放